

# 黒船、再び ①

2015年10月21日

事件。

「ヘラブナ釣りの三大メジャー」とされるタイトルの内のひとつであり、その歴史から、テニスの四大大会ならウィンブルドンとも呼べるタイトルを、第一線で活躍する現役バリバリのバスプロが奪取した。



これは他のスポーツで言うと、たとえばレーサーのジョン・サーティースが二輪四輪両方で世界チャンピオンになった（事実）とか、プロテニスプレーヤーの錦織がスノボでも勝つ、ようなものだ。

いや、「錦織がスノボでも」ってのは飛躍し過ぎなので、せめてバドミントンか卓球くらいにしておこうか。いやいや、国内の話の世界レベルで語るのもアレなんで、タイガースが日本プロ野球とJリーグ両方制覇というか...違うな。

ヘラ師の感覚で言うと、「スギタツ」が「JBトップ50（バスフィッシング国内最高峰のトーナメント）」で「JBワールドチャンピオン（世界ではなく国内の、年間優勝者）」というのが最もわかり易いだろう。そのくらい凄いことなのだ。

野球で議論になるペナントレースとクライマックスシリーズの「価値の差」のような問題は、ヘラブナ釣りにもあり、名門クラブでの年間レースかメジャートーナメントのタイトルか？ってことになると思う。プロ戦かアマチュアかって部分も大事だ。が、ここではスルー。検量方法の差を含めた一勝の意味と、プロ制度についてもそのうち言及するつもりなので、とりあえず読み進めていただけたら幸い。

雑誌媒体にこのトーナメント結果が載るのはまだ先のことから、どのように書かれるのかはわからない。が、コマーシャルライティングが前提の媒体にジャーナリズムはあまり期待出来ず、記者の誰かが今回を歴史的イベントであると受け止めたとしても、深く掘り下げた意見が登場するとは到底思えない。メシの種なら、そりゃ余計なことはいわないわな。なので仕方なく何のしがらみもない僕が書く訳だが、現時点でもSNSを見る限り、今回の結果は概ね好意的に受け止められているように見える。

だが正直、その様が僕にはとても奇異に映ったことは告白しておきたい。そして、その感情はいつたい何なのか。何処から来るのか。それらを自問自答し整理することが、この記事を書き始めた目的というか動機である。

ヤラレちゃった側の反応。

有名人だし、新チャンプのお名前くらいはヘラしかやらない僕でも存じ上げていた。が、面識のない新チャンプをググってみると、以前から「趣味」として相当ヘラブナ釣りにハマっていることは窺えるし、ヘラの競技会での実績も素晴らしい。今回の結果がフロックなどではなく、正真正銘の実力が呼び寄せたものであることは、誰の目にも明らかだ。賞賛に値する。ファイナリスト達は、プロフィッシャーマンであるなしに関係なく互いにリスペクトしあい、同じステージに立ち同じ時間を共有できた奇跡に純粋に感動し、永遠の友情を誓ったことだろう。僕がどれだけアホでも、そこに口を挟む気は全くないし、二位以下の方々を冒瀆する気も無い。

ただし、野次馬までが新チャンプを「ヘラブナを愛好する同士もしくは同志」とだけ受け止めていたら、未来はないように感じた。大会に出てもない部外者に語る権利はないと言われたらそれまでだが、そういう人はプロ野球でもサッカーでも解説者は要らないんだろと思うしね。実は茶の間の自分こそが解説者であることを自覚出来ないおバカさんかもしれず、真逆の妄信なら尚タチが悪い。

僕は、ハッキリ言って悔しかったんですね。ファイナルに残った内の数名が友人だったからってのはゼロではないけど、悔しさのメインは「ヘラ師として」のものだった。予選に参加したって箸にも棒にも引かからないレベルの僕でもね。だって、自分がサッカー日本代表のサポーターだったとして、ラグビーの日本代表にサッカーの試合で負けちゃったようなものだもん。スピードスケートから自転車に転向してきた選手に、最良の選手があっさり日本代表の座を奪われちゃったようなもの。悔しくなきや嘘だろう、と。本当に釣り天狗なら。トーナメンターなら。なぜそこから逃げるのか、僕には理解出来ない。新チャンプに近しい人ならまた違うだろうけど。

自分が主宰するクラブの会員が、そのトーナメントで全国三位となり、そりゃもう嬉しくて嬉しくてFacebookのカバー画像を差し替えるくらいの出来事だったのは事実。それをぶち壊すつもりはさらさらしない。新チャンプを否定するつもりもない。「悔しい」ってのと矛盾するようだけど、歓迎している。この続きも、新チャンプマンセーな内容になる予定だし、僕はバサーもバスフィッシングも敵対視なんてしてないんですよ。高校生の頃は見よう見まねでクランク巻いてますしね。なんせクラブ名はノリーズをパクったナリーズな訳で。この辺は過去に証拠もあるんで紹介していくが、もし僕と似た感情を抱いた方が他にも居るのだとすれば、きちんと受け止め誤摩化すべきではないと考える。それこそが、へらぶな釣りがイマ抱えている問題を直視することに繋がることになると、僕は思うからだ。

様々な他の釣りジャンルを経験し、「ヘラ師」ではなく「釣り師」である方が、相手がヘラのみであっても有利だろうと常々感じてきたが、時間的、経済的に難しいケースは当然あり得る。僕もそうだ。そんなマクロ的な視点は現実味が無いと構えてしまうリーマンである。ただせめて、ヘラというミクロの中を、さらに細分化させてしまうのだけは避けたいと願って来た。

<続く?>



3位 江成 公隆

ポイント：1ステージ 21番  
2ステージ 19番  
※どちらもヘチです...

釣り方：感度の切お立ち会です。総会10パーセント入賞目指し、色気を出して前日に下見をしました。おかげで本番は迷いはなし(笑)。前日はデカウキを使用した深田でいい感触を掴んでいたのですが、当日はカラツンのオンパレード。ウキをサイズダウンして、何とか釣りになりました。

<エサ>

パウダーベイトとマッハを半々で粉のうちに混ぜ、少しずつ水を注いでかき混ぜたしっとりボソが基本エサです。マッハを押し込んだり、ボトムをバラバラと振りかけたりして使いました。エサをいじると発生してしまうネバリを利用し、意図的に脱って使う事はしませんでした。

タックル1：竿 8尺、道糸 1号、ハリス 0.5号 55-62cm、ハリ 上：改良ヤラズ5号

(金) 下：グラン5号

ウキ 自作セミロング21号

(別製15、足6センチのφ6ミリ一本取り、φ1.2ミリグラスムク)

↓  
自作セミロング15号